

■ 研究論文

単行本『笑いの文化人講座』全25巻の資料価値 — 教材としての応用と活用について —

島田 泰子 (教育学部)

はじめに

『笑いの文化人講座』全25巻は、香川県の地域情報誌『月刊タウン情報かがわ』（後に改題され『TJ かがわ』を経て現在『TJ Kagawa』）に連載された同名の読者投稿コーナーをまとめて単行本化したものである。筆者は先に、同書についてその存在ならびに資料性を内外に紹介しつつ、特に地方語文献としての側面に注目し、方言研究に際しての利用価値について論じた（島田（2005））。本稿は、これに続き同書における教材としての側面を指摘し、その利用価値ならびに可能性について述べようとするものである。

本稿の筆者がこれまで担当する授業の中で実際に行った教材活用の事例報告も兼ねて、ここではひとまず大学における入門的なレベルの授業に照準を合わせ、特に日本語学分野での教材化のモデルを示したい。投稿作品中に疑問を呈すかたちで提示された身近な[・]気[・]付[・]き[・]を[・]発[・]端[・]と[・]して、日常的な言語事象の背後にある[・]学[・]的[・]知[・]識[・]へ[・]と[・]視[・]野[・]を[・]広[・]げ[・]る[・]こ[・]と、また両者のそういった[・]関[・]連[・]（[・]こ[・]と[・]ば[・]の[・]学[・]問[・]が[・]、[・]あ[・]ら[・]ゆ[・]る[・]日[・]常[・]レ[・]ベ[・]ル[・]の[・]言[・]語[・]事[・]象[・]に[・]関[・]わ[・]る[・]こ[・]と）を専門的な見地から扱う立場を知り、それによって可能となる[・]学[・]び[・]の[・]深[・]まり[・]を[・]体[・]感[・]さ[・]せ[・]る[・]こ[・]と、それらを当面のねらいとした上で、教材化の試みを紹介することとする。

1. なぜ教材になり得るか

単行本発刊の経緯を含め、雑誌連載当時の概況や、同書の内容・構成・特色などについては、すでに島田（2005）に記した。また、雑誌創刊当初同誌の編集長をつとめ、投稿企画「笑いの文化人講座」の生みの親にして投稿作品の選考・推敲などを一手に担った田尾和俊氏^(註1)自身によって、一連の経緯や当時の実情などが記されている（田尾（2004）、第2章 異色のタウン情報誌 第2節 「笑いの文化人講座」）。よって詳細はこれらに譲り、以下には、特に本稿の趣旨に関わる部分について、その内容や性格などの特色を記すこととする。

『笑いの文化人講座』の掲載作品は、いくつかのジャンルに分類されているが、そのうち、投稿者自身のふとした疑問や意外な発見、あるいは身近な出来事に見出される笑いなどを書き送るたぐいのもの（「考察の館」「なんやねん」など）は、日常のさまざまな事象に対する着眼と洞察にあふれており、

読み手の同感と納得を強く喚起する。特にことばをめぐる疑問や矛盾の指摘などには、日本語における歴史的な経緯や本質的な原理が反映された事象を鋭く捉えた作品が多く、このため、見ようによっては、日本語学に関する専門的な知識への入口となる身近な題材の宝庫となっている。日本語学を専門とする本稿の筆者の目を特に引いたのは、同書のまさにその側面であった。

こういった内容の特性に加えて特筆すべきは、それらの作品群に備わる洞察の鋭さと、知的な水準の高さであろう。田尾(2004)には、以下のような記述が見られる。

投稿コーナーというのは、読者は掲載された作品を見て投稿テイストを察知する。だから、ほのぼのした話を載せると、ほのぼのした投稿作品が集まり始める。過激なものを載せると過激な投稿が集まり始める。おもしろくないものを載せると、おもしろくないものが集まり始める。従って、投稿企画の成否を決めるのは「選考基準」であると言っても過言ではないのである。(p.165)

所収作品群の示す高い水準、洞察の鋭さと内容の面白さとは、作品全般の方向性ととも、選考者の基準とセンスに牽引されつつ読者と掲載作品との循環的な相互作用によって形成された、同企画の注目すべき特色であると言ってよい。21年もの長きにわたる雑誌連載や単行本化(最終的に全25巻に及ぶ圧巻のシリーズとなる)などといった異例の事態を含めて、同書が、同趣の企画を持つ類似他誌の追随を許さぬ群を抜いた存在であるのは、決して偶発的なものではなかったのである。

ところで、作品の投稿者は、大半が当時の中高生によって占められていた。田尾(2004)によると、これは同誌の販売促進に関する編集部の戦略的なねらいによるものであったという。売り上げ部数を伸ばすにあたり「毎日学校で巨大な口コミ集団になる中高生を取り込むのが一番早いということで、わざと狙った」ことで、県下7万人弱の全中高生の実に3%強(30人に1人)が投稿者として同企画に関わっていた計算になるが、さらに(投稿しない)一般の読者を含めて、当時の中高生の間では、同企画を介して巨大かつ強力なコミュニティが成立していた。毎月、同誌の発売直後には、自分たちの学校から文化人が認定されたらしい、などといった話題が、中高生の間で大きな関心を伴って広がったという(注2)。

投稿者の大半が中高生であることで、彼らの着眼の向かうところは、自ずと学校生活における日常の一場面へと集中していた。全25巻の内容をテーマごとに再編集したりミックス版が企画された時、その第一弾として真っ先に刊行されたのが『笑いの文化人講座 Remix① お笑い!学校の事件簿』(2001年8月)であったことなどは、そのあたりの事情を如実に物語っている。

ともあれ、この年代の瑞々しい発想と新鮮な着眼とで捉えられた身近な疑問や発見が、先に述べたようなものごとの本質を突いた指摘となって水準の高い一連の作品に結実したことは、紛れもない事実であろう。

数年前まで彼らと同じ立場にあった大学生も、同世代の視点による疑問の提示に対しては共感を抱きやすい。いわば学ぶ側の実感と問題意識によって(近頃はやりの言い方に従えば「生徒(学生)の目線」で)捉えられ示された日常的な疑問の数々は、日本語のすがたやふるまいについて講じるにあたり、有益な問題提起として機能するのである。

『笑いの文化人講座』の作品が使いようによっては教材として活用できるのは、以上のようなその

特異性に基づくものである。次節には、具体例を挙げつつその有効性を示すこととする。

2. どこが教材になり得るか（その1）疑問提示型の作品

「教材化」と言っても、全巻全文が教材として使えるわけでもなければ、授業中、教科書代わりに机上で広げて使うということでもない。日本語学の基礎として、日常的なことばを客観的かつ体系的に捉え論じるための方法と理論とを学ぶ際に、まずは言語におけるさまざまな事実を示すのに、極めて適した投稿作品がしばしば見られるのである。

以下、その具体例の一端を示してみよう。

（以下の挙例は、作品本文、投稿者の表示、編集スタッフによる対話の体裁を取るコメントまでが原文である（原文は縦書）。出典として、単行本掲載時の巻数・ページ数とともに、〔 〕内にジャンル名を示しておく。）

(1)★「おあがりなさい」はまぎれもなく命令形だが、「おやすみなさい」は寝る人の方が言うというあいまいさで、さらに「おかえりなさい」は相手が帰ってきたにもかかわらず命令形になっているとは何としたことだ。（3年2組 ユニットエチュードⅡ）

㊦ なるほど、「おやすみなさい」は文法的には、たとえば明日学校があるのにスマスマ見て11時になってはまだ親が焼いて食いよるスルメをつまんだる子供に対して親が言うセリフなんやな。

㊧ 体験したように具体的ですね。ちなみに「おかえりなさい」は？

㊦ 本来なら、日曜日の夕方6時になつとるのに人が仕事しよる同じ部屋でうちの子供と一緒にワーワー言うて遊んどる近所の小学生のカツとアキラとケイちゃんとゆうくとみやちゃんに私が言うセリフである。

㊧ なんかすさまじい状況で仕事してますね。 13巻 p.126〔考察の館〕

(2)●今、私のクラスで「兄」の反意語は「姉」か「弟」か「妹」かで論争が続いている。だれか答えを教えてください。（N高課報部/会議室長S）

㊦ こういうのはな、まず図を書いて考えると整理しやすいんや。

㊧ ははー。

㊦ まず、こういうふうに分けてみる。すると、AかBが君だ。その線の対称にいる者同士が反意語。

㊧ Cにいと、ナナメ同士が反意ですね。

㊦ オカマやがな。ちなみに自分を主体にせずに見ると、中央タテ線を軸に語る場合は左右同士が反意。という説を今思いついたんやけど。

㊧ 思いつきですか！

21巻 p.196〔考察の館〕

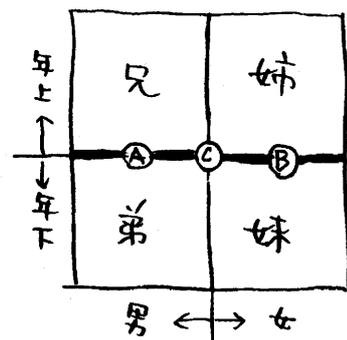


図1

(3)●同じ「おおう」でも「覆う」は「オーウ」と読むのに「追おう」は「オオー」と読むのはこれホタルイカに。（横浜市 右よ）

㊦ おおー！

㊦ いや、しょうもないシャレはいいですから。

20巻 p.251 [考察の館]

我々は普段、日本語で生活しているが、だからといって日本語について十分に知り尽くしているかといえば、実はそうではない。身の周りの現実的な言語事象に関して、改めて問われると答えられないものは案外多い。上記の作品は、そういった問いかけとしてはまさに最適なものであり、かつ、それぞれに日本語学の各分野の重要な項目に該当する諸問題を反映している。このため、こういった問いかけが、授業展開の導入に利用できるのである。

右に示したものは、(1)は文法がらみのものであり、(2)は語彙分野の問題、(3)は仮名遣いに関わる疑問である。この三つの疑問に対して、日本語学的な観点からかいつまんで解説を加えるならば、以下のとおりとなる。

(1)について。挨拶ことばには、文法形式上同じ「動詞連用形+なさい。」であっても、用いられるタイミングの差（動詞によって表される動作の実現に対する、時間的な位置の違い）がある。このことへの気付きが(1)である。「おやすみなさい。」は「あなたもどうぞ（早く）お休みなさい。」の意、「おかえりなさい。」は「ようこそお帰りなさい（ませ）。」の略、と解釈されよう。

前者は、まだ起きている人に対して寝る人が行うやはりある種の命令であると言え、その点で「おあがりなさい。」（どうぞ召し上がれ、の意）の挨拶に同じい。一方後者は、帰ってきている相手に言う点で、すでにいらっしやうた人に言う「いらっしやい（ませ）。」と同じと見てよい。

ちなみに、主に関西方面で行われる、「ごちそうさま。」に対する返答としての「よろしゅうおあがり。」の「おあがり」も、すでに食べ終わった人に対して言うものである点で、帰宅を迎え入れる際の挨拶ことば「おかえり。」などと同類のものと捉えられる^(註3)。こういった身の周りの挨拶ことばを、文法的な観点から改めて見直すよいきっかけとして、(1)は有効である。

(2)について。「反意語」は、専門的には「対義語」と言う。俗に「反意語」（意味が反対の語）と呼ばれることに象徴的なように、対義語は一般に「意味の最も遠い語」同士という印象があるが、全く関わりを持たない二語は、意味上の接点を持たず、対義語にはなり得ない（例えば、「猫」と「書道」、「眠い」と「丸い」のように）。術語「対義語」の示すとおり、語義が対になるとは、ある共通する前提のもとで、意味のある部分について両者が対極をなすことを言う。

例えば「男」と「女」の二語においては、性別を表す名詞であるという前提を共有した上で、世に存在する二つの性別のうちどちらを指すか、という点が対をなす。あるいは「熱い」と「冷たい」の二語は、温度に関する形容詞であるという前提を共有した上で、高温の場合を指すか低温を指すかという点で対となる。いささか屁理屈をこねるならば、客観的・物理的に形容詞「高い」（地上方向への距離の大なることを意味する）と反対の意味を表すのは、「低い」ではなく「深い」（地下方向への距離の大なることを意味する）である、ということにもなり得よう（図2を参照）。言語主体である人間の生活は、長らく主に地上で営まれるものであ

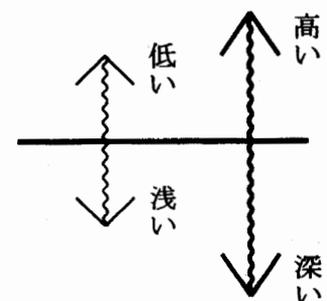


図2 「高い」と「低い」の対義性

たから、通常我々は、地上方向への距離を意味する形容詞であるという前提を共有する「高い」と「低い」とを、距離の「大」「小」において対をなすという点で対義語として認識していると思われる。

対義語における対義性とは、今述べたとおり、意味におけるどの要素を前提として共有し、どの部分において対をなすかによって、成立する。その意味で、(2)における疑問は、イラストが示す長幼(X軸)・男女(Y軸)の二軸のうち、どちらを共有しどちらについての対極を取るかによって、「姉」「弟」の二語が両方とも「兄」の対義語たり得るのである(「妹」は、二軸ともに対をなすという点で、一般的な対義語として認めるには少し無理があるか)。

柴田(1987)に言うとおおり、何らかの前提を共有する点で、対義語は、ある種の類義語である、とさえ言える。こういった語の意味構造を意識的に捉え、類義・対義の体系性についての知識を深めるのに、(2)は問題提起として極めて的を射た疑問であると言える。

(3)について。現行の「現代仮名づかい」(昭和二十一年に「現代仮名遣い」として制定、昭和六十三年に改訂)は、歴史的仮名遣いに比べても全般に表音仮名遣いと言えるが、部分的にはやはり表語的な側面を持つ。いわゆる四つ仮名やオ段長音の表記などがその代表であり、同じ音に対して「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の仮名を、あるいは「おお」と「おう」の表記を、語によってそれぞれ使い分けなければならない(「いなずま」と「にいづま」、「おおきい」と「おうさま」など)。こういった「音は同じなのに表記が異なる」例に気付くのは通常のことであるが、(3)は、逆に「表記は同じなのに音の上で異なる」例への気付きという点で、洞察の鋭さにおいてとりわけ秀でている。

両者における読みの異なりは、活用語における語幹保持の意識が大きく作用しているものと見られる。「覆う」に関しては、「おお〔語幹〕+う〔活用語尾〕」の構造を持ち、「おおわ(ない)」「おおい(ます)」「おおう(。o)」「おおえ(!)」のように活用させて変化しない語幹「おお」の部分音が音声上まとまりを持って長音化し「オー・ウ」となる。一方、「追おう」は、「お〔語幹〕+お〔活用語尾〕+う〔助動詞〕」の構造であり、「おわ(ない)」「おい(ます)」「おう(。o)」「おえ(!)」「おおう」のように活用させて変化しない語幹「お」の直後に切れ目を持ち、語尾の「おう」が長音化して「オ・オー」となる。

いずれにしても、音と仮名とは必ずしもいわゆる一対一対応ではないこと、こういった仮名遣いの問題には、必ず音韻上の事情(音韻変化など)が背後に存在すること、また母音の連続は実際には長音化を起こすこと、などといった、音韻・表記分野の知識へとつながる気付きであろう。

3. どこが教材になり得るか(その2) 事実指摘・事件報告型の作品

先の(1)~(3)のように明らかな疑問文のかたちで示されるもの以外に、発見の報告や事実の指摘、ちょっとしたエピソードなどを題材とした作品にも、同じ価値が見出される。以下、いくつか例を示そう(以下の例においては、一部を除き編集部のコメントを割愛した)。

- (4) 子連れ狼の主題歌を「♪ひとしとピッチャン」だと思って、「ひとし」って誰やろ、と悩んでいたことがある。(岡山市 つろっこ) 23巻 p.224 [カンちがい]

- (5) K子さん曰く、「鮭」のことを「シャケ」と言う人は信用ならないそうだ。(岡山市 つろっこ)
- Ⓐ ええ感じやねえ!
 - Ⓑ 何がですか。
 - Ⓒ いや、このわけのわからん物差しを持ってると感じる。というか、言わんとしていることも何となくわかるような気がせんか?
 - Ⓓ 確かに、わかるような気もしますねえ。
- 25巻 p.50 [なんやねん]

- (6) ●「来た」と「来る」は過去形と現在形という違いだけなのに、「よく来たね」は本音も建て前も歓迎しているが、「よく来るね」は建て前は歓迎だが本音は「もうこんでええ」である。(小豆郡 Aマンゴー)
- Ⓐ 「よくやった!」と「よくやるよ…」も本音が正反対やぞ。
 - Ⓑ 言い方が違いますやん!
- 20巻 p.251 [考察の館]

- (7) ●中学の時、形容動詞を習っていてみんなが「静かだ」「爽やかだ」と挙げる中、「バカだ」と言った生徒がいて『バカだ』はちょっと違うな」「何故ですか?」「『～かだ』がつかないといけないのだ』『バカだ』だっつてつくじゃありませんか」「…『バカだ』は『アホだ』とも言い換えられる」「先生、馬鹿と阿呆はちょっと違いますよ」「…」というやりとりをしていたのを、何を議論しているのかわからないままみんなで見守っていた。(横浜市 右よ)
- Ⓐ 論点のわからない議論は、入って行きようがない。
 - Ⓑ 見守るしかないですね。
 - Ⓒ 見離すという手もある。
- 20巻 p.144 [なんやねん]

これらに対しても、かいつまんで解説を加えておきたい。

(4)はヒとシの音の近さによる混同の問題である。現代日本語のヒは硬口蓋摩擦音、シは歯茎硬口蓋摩擦音で、極めて接近している。ために両者はしばしば混同されるが、一般に、東京方言ではヒがシに^(注4)、関西方言においてはシがヒに混同される傾向が強い。(【写真1】【写真2】を参照)



【写真1】 東京土産のパッケージ。江戸なまりのヒーローウルトラマンが、「こちとらしいらうだっつてんだ」と歌舞伎の見栄のポーズ
(羽田空港にて。撮影島田)



【写真2】 駅のホームにある質屋の宣伝看板。堂々と関西ふう「ひち」とあることでつとに有名
(阪急電車 十三駅にて。撮影島田)

音の近さというものの科学的な正体として調音点や調音法などの解説へとつなげれば、音声学の基礎も学べ、また接近・混同の問題については、音韻論の基礎として、音韻史の前置きなどに使うことも出来よう。

(5)も音韻史に関係する問題である。「シャケ」よりも「サケ」のほうが規範的な(正しい)語形との印象を与えるのは、直音に対して、拗音がややかたことめいて聞こえるからであろう(「~でしゅ。」「くましゃん・おうましゃん」「あちゅい」などといった物言いは、通常、典型的な幼児語らしさの象徴である)。しかしここで問題となるのは、幼児語でもないのに現代日本語において「シャケ」の語形が一般に行われること、さらには、これが「サケ」と共存して二重語形となっていることの方である。

授業に使うならば、この疑問を発端としてサ行子音の歴史を繙くことが出来よう。日本語のサ行子音は、古くは五音全てが歯茎硬口蓋摩擦音 [ʃ] であり(さらに遡ると破擦音 [tsʃ])、サシセソは音の上で「しゃ・し・しゅ・しえ・しよ」であった。サスセソの四音は今日歯茎音化した、イ列のシに関しては、現在も歯茎硬口蓋音のままとなっている。現代語においてサ行のうちイ列音のシだけが、ローマ字での表記に際してヘボン式の場合に“shi”のように h が入るのは、調音点の違いによって実際の音価が異なるからであるが、こういったサ行子音に関する歴史的な経緯を反映したのが、「鮭」を意味する二重語形「サケ」「シャケ」の共存であると見られる。地域の仏壇仏具店の店名(「ずずや」)に見られるように、数珠を表す語に「ジュズ」「ズズ」の両語形が見られるのも、小魚を意味する語として「ザコ」「ジャコ」が併存するのも、これと同様の事例である。

なお、エ列音のセに限っては、比較的遅い時期まで [ʃe] の発音が残った。近世初頭のキリシタン資料『ロドリゲス日本大文典』に見える記

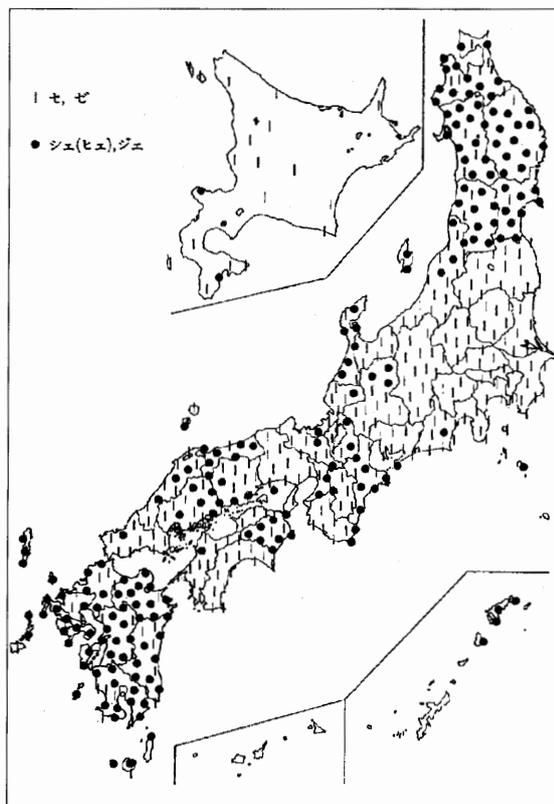


図3 方言に残るシエ・ジュの音。
徳川(1979)より

気象評論家「秋雨じえんしえんが」

福井敏雄さん死去

84歳



「お天気おじさん」の愛称で親しまれた気象評論家の福井敏雄(ふくい・としお)さんが7日、老衰のため亡くなったことがわかった。84歳だった。告別式は30日午後0時30分から、大阪市淀川区西中島2の11の26 北大阪祭典で。喪主は二男、明栄(あきひで)氏。自宅は公表していない。徳島県生まれ。気象大学校の前身、官立気象技術官養成所を卒業。前年

に卒業し、陸軍気象部に配属された。戦後は、気象庁の徳島や彦根地方気象台などを経て、大阪管区気象台では天気相談所長も務めた。

ラジオで天気解説を担当したのは1971年から。当時、アウンサーだった中村鋭一・元衆院議員との掛け合いが評判を呼んだ。気象庁を退官した80年からはテレビにレギュラー出演。週7本の番組を抱えた時期もあった。

番組がない日には各地の講演会へでかけ、気象を題材にした人生観を披露するなど「お天気人生」を歩み、09年には「ユーモアあふれる人に贈られる「ゆづもあ大賞」を受賞した。

「秋雨じえんしえん(前線が……などと言語、独特のアクセント、きまじいな語り口が親しまれた。

「お天気おじさん」の愛称で親しまれた気象評論家の福井敏雄(ふくい・としお)さんが7日、老衰のため亡くなったことがわかった。84歳だった。告別式は30日午後0時30分から、大阪市淀川区西中島2の11の26 北大阪祭典で。喪主は二男、明栄(あきひで)氏。自宅は公表していない。徳島県生まれ。気象大学校の前身、官立気象技術官養成所を卒業。前年

【写真3】「お天気おじさん」福井敏雄氏の逝去を報じる新聞記事 (読売新聞 2005.4.20)

述^(注5)から、中世末頃には関東方面において今日のセのように歯茎音化が起こっていたと考えられるが、現代にもなお、地域によっては、古い世代を中心として歯茎硬口蓋で調音する「シェ（濁音はジェ）」の発音が残存する（図3を参照）。九州出身の歌手が主人公を演じたドラマの名ぜりふが、物真似においてしばしば誇張的に「僕は死にまっしえん！」と発音されること、徳島県出身の気象予報士が、「秋雨じえんしえんが…」と聞こえる独特の語り口で親しまれたこと（【写真3】を参照）なども、記憶に新しい。

こういった身の周りのさまざまな事例との関わりにおいて「サケ」と「シャケ」の問題を捉え、(5)の指摘を改めて眺め直せば、その背景にひそむ言語事実の広がりを実感されよう。

(6)は、連用修飾の問題や副詞における意味の諸相を考えるのに発端として適していると見られる。形容詞「よし（よい）」に由来する副詞「よく」は、「よく出来た話」「よく来た」「よくやった」のように本来の語義（「よい」様子そのものや、ことがらに対する「よい」という話し手の評価を表す）をとどめつつ、用法によっては頻度（「しょっちゅう」）や可能寄りの意味（「～することが出来る」）を担うことがある。「よく来る」「よく転ぶ」などは頻度、「よくそんなことが出来るものだ」、関西方言での「ほんまによく言わんわ」など^(注6)は可能寄りの意味となる。「よく来るね」が半ば呆れを伴うような口吻になるのは、相手の訪問の頻度についてことさらに言及することから生じるものであろう。結果として、ことがらへの「よい」という評価とは正反対の「もうこんでええ」（「もう来なくてよい」）の含意となると見られる。

ちなみに、「来た」と「来る」、「やった」と「やる」との対比に着目すれば、一般に「過去形」「現在形」とみなされがちな動詞のタ形とル形との本質にも迫ることが出来る。タ形には完了の相、ル形には反復される動作や行為の恒常的な側面、などといったアスペクチュアルな性質が備わっており、英文法のテンス（いわゆる時制）の概念に毒された意識から解き放たれて、日本語のアスペクト（時相とも）に関する正確な知識を得る機会ともなるだろう。

(7)は、品詞論に関わる問題を含んでいる。いわゆる形容動詞^(注7)の語幹には、「のどか」「すこやか」「しとやか」「ほがらか」「たからか」のように情態言を構成する接尾辞カ・ヤカ・ラカ（またはその交替形のヨカ・ロカ）が含まれることが多いから、形容動詞であるかどうかの判断に際して、語形が「～かだ」となっていることはおおよその目安となろう。ただし、形態上はそれらと同じく「～かだ」を一見含む「バカだ」が、どのように他の形容動詞と「ちょっと違う」のか、(7)では教師によって全く示されることがないまま、議論があらぬ方向へズレて行く。もちろん笑い話としてはそこが面白いのであるが、中学校における文法教育の実態としては、いささか遺憾な現状であると言える（(7)に付された編集部のあまりに冷やかなコメントに、教育現場の実情に対する批判的なまなざしを見て取るのは、うがちすぎであろうか）。

「馬鹿」は漢籍に用例の見える漢語由来の語であり^(注8)、名詞としての用法を持つから、一般の形容動詞語幹（名詞のように格助詞を伴って文の格成分に立つことがない）とは確かに一線を画す。(7)における教師の「ちょっと違うな」という判断は、その意味において誤りではない。「あのバカがまた余

計なことを…」「バカに付ける薬はない」などといった用法（格助詞「が」や「に」を伴う）における「バカ」の語は、明らかに名詞であって、扱いに迷うことはなからう。

しかし「今日はバカに暑い」「バカな事を言うな」などの連用・連体の修飾機能を持つ点で、「バカだ」は形容動詞としての認定を受けてもよい。もちろん、名詞が断定辞を伴って「これはペンだ」「あれは本だ」のように述語に用いられたものと、形容動詞述語文「あいつはバカだ」とは、極めて連続的である。この場合の「バカだ」が〔名詞＋だ〕の構造にも捉えられることは、名詞の部分が類義語「アホ」とも差し替えられる、という自在性が裏付ける。(7)における「言い換えられる」との説明は、そのことに触れたものであるはずだった。ところが、これが文法的な機能面での問題であることの説明を欠いていた^(註9) ために、類義語における意味差の問題であるかのように生徒が取り違えてしまった。これでは、「何を議論しているかわからないままみんなで見守る」または「見離す」しかなからう。

「バカ」の語のように、形容動詞としてのものと名詞のそれとを截然と区別することの難しさが場合によって生じるのは、まれな例かも知れない。多くの場合、品詞名は語ごとに定まっているものであり、ゆえに、品詞という存在じたいが語への名付けであるとの理解が一般である。ただし厳密には、品詞とは語の形態などとともに文法的な機能によって認定されるものであって（先の(6)における形容詞「よい」の連用形「よく」を副詞と認定するのもこれによる）、その意味では、語ではなく用法への名付けといった側面をも持つ。実際、教育現場において一般に用いられる、橋本文法を基盤としたいいわゆる「学校文法」でも、ある語を品詞に分類するのに用いられるフローチャート式の整理図に、「主語になるかならないか」「修飾語になるかならないか」といった選別のための項目が存在する。形態や活用の有無、機能面での特徴など、語のどういった側面に着目してどのような分類を行うかによって、品詞の認定も異なり、あまつさえ、（異なる文法家によって指定された）異なる文法体系においては、分類基準や品詞名さえも全く違って来る…、などといった話、つまりいわゆる品詞論の問題を語るに、(7)に描かれたような事件（多少の脚色はあるにしても）は、極めて重要な示唆に富むと言えるのである。

以上、いささか紙幅を費やしたが、こういった何気ない疑問や指摘にも日本語学的な広がりや深まりが存在することを示すため、各投稿作品に対してそれぞれ解説を加えた。

同書においては全般的に、各作品のとぼけたコメントがおかしみを添えているが、(1)も(2)も、一見大まじめなコメントに見せつつあえてあらぬ方向へ話をそらすようになっているのは、お笑い（漫才など）の用語で言うところのボケの手法であろう（編集部のコメントがスタッフによる対話の体裁を取るのボケに対するツッコミを構築するためもあるようで、(2)の「思いつきですか!」や(3)の「いや、しょうもないシャレはいいですから。」などは、その典型と言える）。(7)に対する突き放したようなコメントもまたおかしみを醸し出す。

通常、面白がるための〈笑いのネタ〉に解説を加えることなどは野暮の骨頂であるが、学びの材料と見る発想からは、これを逆手に取って活用しない手はない。コメントがまともに取り合わなかったり（と言ってもその鋭い指摘そのものは評価しているから作品を採用し掲載するのであるが）、あるいは、(5)(6)のように言語意識に共感したり問題提起された事象に類例を添えたりしつつ、結局のところともにあえてそれ以上追究せず、問いかけは問いかけとして疑問は疑問のまま示されたこれらの作品に、

教材としての価値を見出し、逆に価値付けをして行くことは、なかなか愉快なことでもある。言われてみればもっともであるが通常答えは出ないであろう、と見られがちなこういった疑問に対し、専門的な観点からはそれが十分に可能であることを示すのが、我々専門家の役割でもあり、ことばの学が提供出来るある種のウェルフェア^(注10)でもあろう。学ぶ側にとっては、それが大きな驚きを喚起し、また学びの意義を実感させるものともなるようである。

4. どのように教材として活用するか

さて上記のような、洞察と示唆に富む一連の作品群を、実際の学びの場において、どのように教材として活かすか。前節2. において行ったような解説を、関連する資料を示しながら語れば、講義科目においてはそれぞれが授業内容となり得よう。ただしそれでは、受講する学生たちはあくまで受け身の立場に置かれる。ここでは、ひとつのアイデアとして、『笑いの文化人講座』の作品を発端とした調べ学習の形式を取る(演習などの)授業展開のモデルを示してみたい。学びの当事者たる学生たち自身が、提起された問題をめぐって、周辺的な問題や背景となる言語事実を調べあげるのである。それに考察を加え、まとめて、発表することで、調べて明らかになった事実や関連する知識などが、他の受講生たちにも共有される。想定するのはそういった形式の演習であるが、学生の自主的な学びを支えるには、授業者自身が、資料や調べ方や基本的な専門知識など必要となる情報を学生たちに適宜提供し、目指すべき事実にとどり着けるよう、指針を示して文字通り教え導く必要があることは、言うまでもない。

調べ学習の材料には、調べれば調べたなりに、いろいろな問題と絡みながらさまざまな方面(分野)の事実の発見へと複合的に展開し得る題材が適している。以下には、文献国語史学(通時論)、方言地理学(共時論)、類義語がらみの語彙論(共時論)など、複数の分野へ発展し得る問題提起としての投稿作品を、2点ほど取り上げてみる。まずは次の作品である。

(8)●「しおっからい」という言葉はあるが、「さとうっあまい」という言葉はない。(円座町 ケン)

3巻 p.74 [なんやねん]

「さとうっあまい」という語は、たしかに存在しない。促音の直後の母音という通常日本語にあり得ない音韻構造を想定したところが、この作品のおかしみをさらに増しているが、促音を介さない「さとうあまい」であっても存在は認められない。まずは、そのような語の使用者がいないことを、発表担当者が教室内の他の受講者に問いかけ、挙手のかたちで応えてもらって確認することから始めるのも、問題意識(なぜ「さとう(っ)あまい」の語は存在しないのか?)を共有するためにはよいかも知れない。

次に、塩味の濃いことを表す味覚表現として、「しお(っ)からい」を含め日本語にどのような語彙が存在するかを調べる。これには、類語辞典の類に加え、方言辞典なども活用する。

今度はそれらが地理上どういった分布をなすか、『日本言語地図』^(注11)を調べ、発表資料に加える。

調査には、当然、同地図の現物にあたるのが望ましいが、発表用には、現物の複雑な分布を簡略化

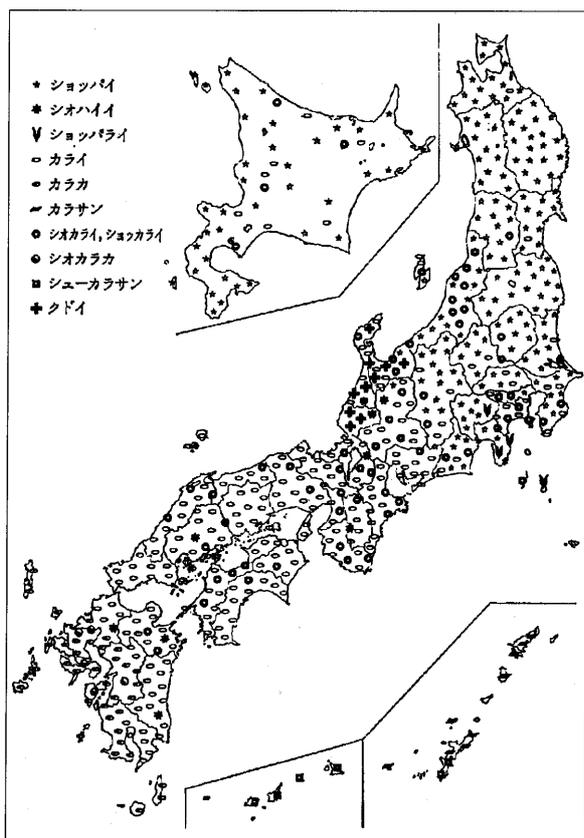


図4 「塩辛い」味を表す形容詞の分布
真田 (1979) より

したものを使うことも考えられる。図4のような既成のものを利用するよりも、発表担当者が自分たちの手で、大きめの模造紙などにオリジナルの簡略図を作成し、発表の際に教室の前に貼り出すなどすると、いかにもいわゆる調べ学習の発表らしい様式が備わる（とりわけ小中学校教員のたまごである教育学部生たちは、空き時間に空き教室へ集まって仲間とにぎやかに作業をしつつ色とりどりの掲示物を作成することを心から楽しむ能力にたけている）。簡略化の過程において、言語地図の読み方、分布の把握などの鍛錬がなされれば、それも学びの重要な要素となる。

さて、方言に見られる語形が、多くの場合文献上にも古語として確認出来ることについて既習であれば（未習の場合は授業者が示唆）、ここからは文献上の用例の調査へと進む。古語辞典の類や日本国語大辞典のような総合的な大型辞書を調べ、初歩的な作業としては、それぞれの挙例について、本文にあたり、前後の文脈なども確認した上で引用し、これも発表資料に加える。

これらの作業を通じて、初出年代の確認や語形の新旧の認定、語形の変化など通時的な変遷について、考察を加え、整理する。最終的には、以下のように調査の成果がまとめれば^(註12)、口頭発表となる。

現代語の分布状況については、東日本全域に見られる「ショップパイ」（図4の☆印）・西日本全域の「カライ」（○印）というおおまかな東西対立型の分布を認め、それとは別に、東西を問わず広い範囲に見られる「シオカライ」系の語（●印、●印）が行われていることを看取する。一方、文献調査の結果から、地図上では山間部など辺境地域のみに見える「シオハイイ」（図4の▲印）が東日本の「ショップパイ」の原型であることを突き止め、さらにはそれが「シヲハユシ」を経て「シハハユシ」の語形に遡れることを押さえる。『日葡辞書』に見える「Xiuofayui. Meliùs Xiuafayui.」（シヲハユイ. シワハユイと言う方がまさる.）との記述から、中世末期頃には「シワハユイ」「シヲハユイ」の両語形が併存しており、しかも前者のほうが規範的な語形であったと考えられるが、これに関連する事項として、シハからシワへはハ行転呼音現象による変化であること、シワからシヲへは、「塩」の語に引かれての類推による語形変化と見られること、などにも調査が及べば、上出来であろう。

こういった通時・共時両面における事実認定をふまえて、最終的に目指すのは、当初の問題提起に対する回答である。ここからは、発表担当者だけでなく、発表を聞いて前提となる事実に関する知識

を共有した他の受講生も含めて、全員で討議を行い答えを見出して行くのもよい。

先にも2. において(5)に関連して引用した『ロドリゲス日本大文典』には、

Gomi (五味)。 Itçutçuno agiuai (五つの味ひ) の意。即ち, suxi, nigaxi, amaxi, caraxi, xiuafayui.
(酸し, 苦し, 甘し, 辛し, 鹹い。)

といった記述が見受けられる(第三章。土井忠生氏の訳による)。代表的な味覚を五つの区分で認知し、それぞれへ名付けを行う言語体系が存在しており、ここでは、塩味の濃いことは「辛し(カライ)」とは区別して扱われる。この体系が用いられる限り、塩味の濃いことを表すのは「辛し」とは無関係の、シハハユシ→シワハユシ(シワハユイ)→シヲハユイ(シオハイイ)の系列を引くショッパイである。これを採用するのが東日本のショッパイ言語圏であると捉えられる。

これに対して、西日本は主に塩味の濃いことを表すのに「辛し(カライ)」の語を使う。先に見た五つの区分のうち二つが区別されず合併したような体系と見ることが出来よう。ただし「辛し(カライ)」の語は、いわゆる調味料のカラシ(芥子)やトウガラシ(七味系)、大根おろしの辛さなども含め、舌に鋭い刺激を感じるような味覚全般に用いる語である(食生活の多様化した今日では、さらにマスタード系(洋辛子)やチリソース系、カレー味、韓国風の味付けなどといった香辛料系のきつさに至るまで、全てカライが担うことになっている)。これらの味覚の中から、やはり塩分による辛さを特に呼び分けようとするのが、「カライ」が「塩」を冠したシオカライの語であると考えられる。平安末期の漢和辞書『類聚名義抄』には、「壘」「鹵」「鹵」の三字に対し、「シハ、ユシ」と並んで「シホカラシ」の語が見られる(観智院本 法上九九)から、現代語に言うシオカライは、ショッパイと並んで相当に歴史のあることばと見ることが出来よう。

最終的に、(8)の指摘に基づく問題提起、〈シオ(ッ)カライという言葉はあるのに、似た構造のサトウ(ッ)アマイがないのは、なぜだろう?〉に対しては、「辛さに区分される味覚には古来多種多様のものが含まれていたことで、シオ(ッ)カライの語は古くから成立していた、一方甘さのバリエーションはほとんどないために、あえてサトウを冠したアマイの語は生じることがなかったのだろう」というのが答えとして考えられることになる。

これとよく似た手法と展開とが見込まれる題材を、もう一点示しておきたい。

(9) 某手前のX先生は、テストで40点未満の答案に「バカ」、40点以上60点未満の答案には「アホ」と朱書して返すが、先日採点ミスで39点から41点になったT畑の答案が、「バカ」から「アホ」に訂正された。

(絵はがき坂 作者不明の地図)

㊦ 一段階アップやな。

㊧ うれしも何ともないですよ!

10巻 p.183 [悲惨なヤツ]

生徒との信頼関係が前提となったおふざけであろうが、ともあれここでは特に、「バカ」「アホ」両語における、価値の相対的な上下に関する言及に注目したい。コメントにも「一段階アップ」とあって^(註13) 明らかなように、ここでは「アホ」と言われるほうが「バカ」と言われるよりもまだマシ、との価値判断、つまり「アホはバカより上」という認定が前提となっている。

ここから提起されるのは、「本当にアホはバカより上か？」という問題である。さらには、そうであるならば、それは何故なのか。単なる内省などによる素人談義めいた話し合いに終わらせず、ここから日本語学的な追究に向かい、調査を進めて、ことの解明に当たる。それが、主体的なスタイルを取った調べ学習として成り立ち得るのである。

知られるとおり、関西一円ではアホを日常的に用いる。このため、アホとののしられてもさほど腹が立たないことが多い。これについては、田辺聖子氏のエッセイにも言及がある——関西人にとってアホの語は親愛を込めたことばでもあり、侮蔑や叱責や嘲弄、憫笑などを一切含まずに用いられる場合も多い、一方、東京弁のバカは一刀両断、弁解の余地もなく、まわりの人もとりなしようがなくなるほど、容赦のない罵倒である、云々^(注14)。

これは逆のことも言えるのであって、東京の人間にとってバカの語は時に親愛を含み、必ずしも侮蔑にあたらない場合が多い。一方、彼らにとってのアホの語は、関西人がバカと言われた時と同様の衝撃をもたらす、きわめて攻撃性の高い罵倒のことばとなる。東京の人がアホと言われて血相を変えて怒るのは、田辺氏が言うように「東京人は、『あほ』を直訳して『馬鹿』と結びつけるから」では決してない。地域によって日常的に用いることばが異なっており、頻繁に口にする身近なほうの語はさほどのショックを与えず、もう一方の語において相手をおとしめる度合いが高くなる（言われた側のダメージが大きくなる）のである。

よって、日常的にバカのほうを専ら用いる関東一円の地域などでは、(9)の発想は理解しがたいことになる。「一段階アップ」どころか、バカのほうがアホと言われるより断然マシのはずである。教室内の受講生の出身地がさまざまであれば、問いかけと挙手による回答などで、自分と全く逆の判断を示す学生の存在を目の当たりにして、お互いに少なからぬ驚愕を覚える様子なども観察される。(9)を発端とする調べ学習では、授業者がまずここまでの事実を整理して示し、そこからの出発としてもよい。

それでは、実際にどの地域が「バカよりアホのほうがマシ」で、どこからどこまでが「アホよりバカのほうがマシ」なのか。ここからは、先の(8)と同様の手法で、文献国語史学や方言地理学などを含めた語彙論へと展開させる。卑俗な語ではあるが、この問題に関してのまとまった研究として、学術的な手法にのっとった松本(1993)が参照される。マスコミを通じての大規模な方言調査と、精緻で綿密な文献調査とに支えられた、極めて実証性の高い論が展開されながら、エンタメ性の高い読み物としての要素も持つ良質な著作である。(9)は、高校生活におけるちょっとした日常のひとつを描いた笑い話ではあるが、これを発端としつつ、上記の著作を手がかりとすれば、ことばの学問の驚くほどの広がりや深まりに到達できることであろう。

本稿では紙幅の関係上、詳細を割愛するが、東京のバカ VS 関西のアホ、といった対立のイメージが強く、これを東西対立型の分布と想定する向きも多い。しかし結論から言えばアホとバカに関する語彙の分布はいわゆる圏分布をなしており(図5を参照)、東京のバカ、関西のアホ、に続いて、九州方面も実はバカのほうを用いる地域となっている^(注15)。もちろん、この二語以外にも実に多種多様な生活に密着した語彙が存在し、それらの語彙における歴史的な消長が、分布に反映されている。

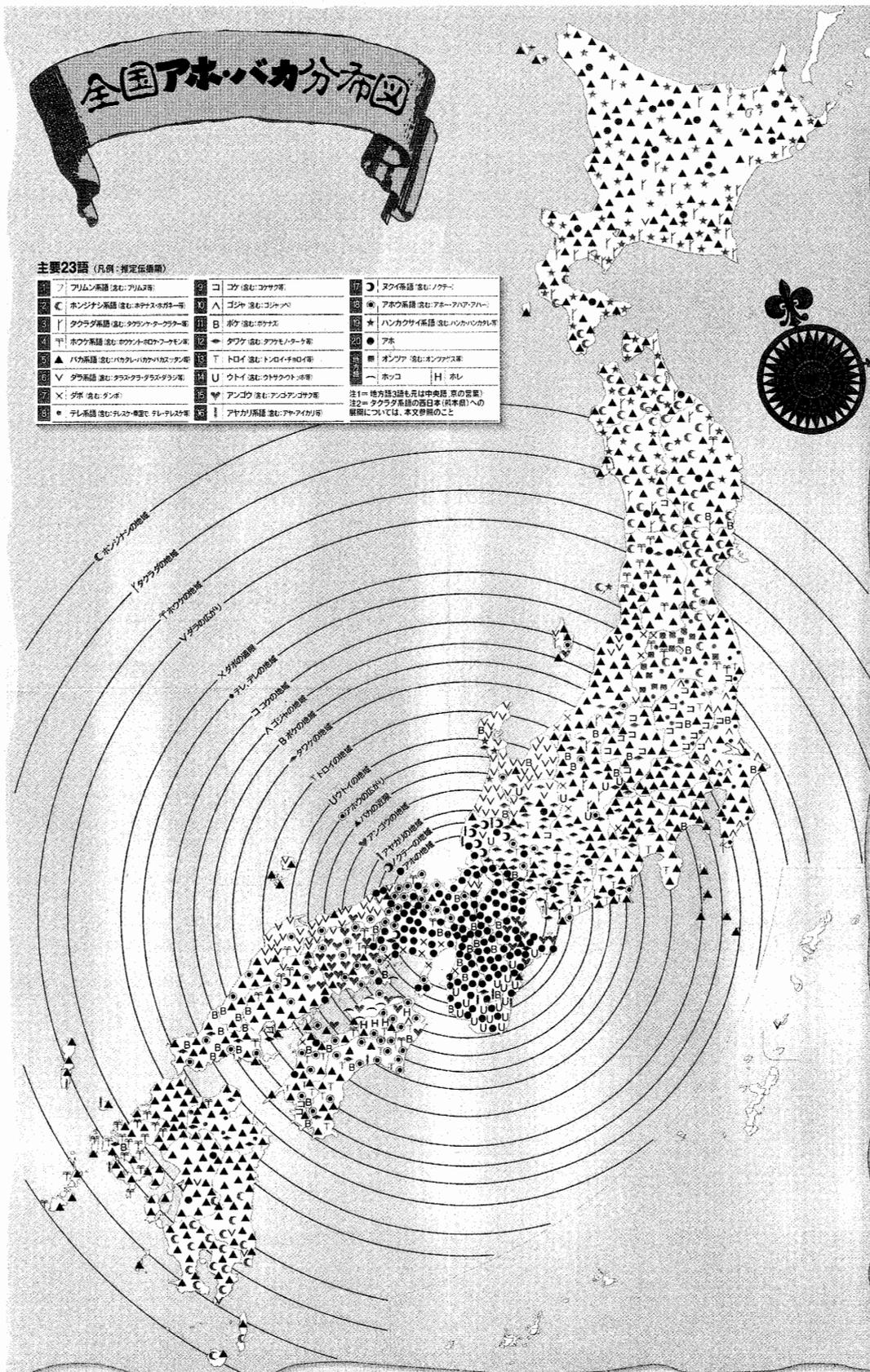


図5 全国アホ・バカ分布図。アホ・バカ以外にもさまざまな語彙が典型的な周囲分布をなす (松本 (1993) より)

5. 『笑いの文化人講座』全25巻は教材の宝庫

以上、『笑いの文化人講座』に収められた投稿作品のうち、特に日本語学分野の専門的な知識の学びに深く関わる問題提起を含んだものを取り上げ、それらの背景にある言語の事実や歴史などをめぐって解説を行い、教材化の試みを提示した。

上に引用したもの以外にも、同書には、まだまだ魅力的な題材が山のように眠っている。同じ問題につながる複数の作品も随所に見られ、それらを組み合わせて使うこともまた可能である。以下には、なおいくつか、その片鱗を示しておきたい。

☆ 語種と表記の対応に関する問題を含む作品

(10) ●私は小学1年の時、国語のテストで「次の名前をカタカナで書きなさい」という問いでミルクとセーターの絵が載っているのを見て、その題意が理解できず、「なんでこんなカタカナで書くんやろか」と思いながら「ギューニュー」「フク」と書いてマルをもらった。(京都市 シオリ) 5巻 p.100 [なんやねん]

(11) ★何で「ソウル」だけカタカナ表記するん? (高松市 ぐっしい)

㊦ 調査隊の出番やな。

㊧ 我々にわからないことは全部、調査隊の出番ですね。

25巻 p.148 [考察の館]

和語・漢語・外来語といった語の出自による分類についての教育は、小学校からすでに始まる。語種の違いに、表記の際の文字種の違いが対応し、順にひらがな(和語)・漢字(漢語)・カタカナ(外来語)での表記がそれぞれふさわしいことから、表記上の適切さについて学ぶためもある。同時に、語種概念を持たせることで、日本語において本来異質であるものへの意識付けを行って、近年問題になっているカタカナ語の濫用^(註10)などを是正し、自国語のアイデンティティを保とうとする狙いもあろう。(10)に見られる一見奇妙な出題は、こういった教育カリキュラムが背景にあってのものと思られるが、語種概念や、語種を異にする類義語同士の言い換えなどについて学んでいない相手に対して、この唐突な出題はいささか酷であるように思われる(不正解にもかかわらず「マルをもらった」あたりが、話のオチとしては大いに苦笑を誘うところであろう。大半の児童が同様の答案を書いたか)。

なお、日本語における先の三種の語種は、漢字文化圏にあって同様の言語事情を持つ韓国朝鮮語にも、そのまま存在する。ただし和語に相当するものは「朝鮮固有語」あるいは単に「固有語」と呼ばれる。「釜山」^{プサン}「慶州」^{キョンジュ}「大邱」^{テグ}など漢語(字音語)による地名がほとんどである中で、首都 ソウル^{ソウル}だけは固有語の地名であり、ハングル(朝鮮文字)では表記出来ても漢字では表記出来ない。(11)が指摘するように、日本語においてこの都市名を漢字ではなくカタカナで表記するのは、これによるものである。

☆ ことばにおける位相性と役割語に関する問題

- (12) ●西日本出身の私たちは「～じゃー」とか「～じゃのー」とかをわりと違和感なく使うが、よく考えてみると漫画などで博士やじいちゃんがよく使う「～じゃよ」という言葉は、全国どこを探しても使われていないのではなからうか。(東京都 海がきこえる果実頃) 13巻 p.153 [考察の館]
- (13) ●教科書や参考書に出て来る「～じゃよ」などと言う「ナントカ博士」。(倉敷市 春風にゴスペル) 15巻 p.152 [ダサイやつ]
- (14) ●よくマンガでは、犬が「そうだワン」猫が「そうだニャー」などとしゃべっていて、さらに象は「そうだゾウ」などと言うが、それは鳴き声ちゃうぞ！(愛媛県 矢野和正) 12巻 p.229 [考察の館]

話し手の年齢や性別、世代や地域などといった社会的な属性が、ことばづかいに反映された場合の、ことばにおける特徴などの側面を、「位相」と呼ぶ。位相性は現実なことばの実態として存在するものであるが、歴史的にはこれに類するものに由来しつつ、すでに現実離れた架空の特徴を備えたことばづかいが、一方では存在する。マンガや小説の中では、お嬢様ふうの人物が「あたくし、もうびっくりしてよ。」と言い、老人や博士が「わしの考えておることも全く同じじゃ。」と言い、会社の上司は「君も会議に出席したまえ。」と言うが、現実のお嬢様や博士や上司はそういったことばづかいを一切しない。



【写真4】参考・ファーストフード店で新メニューを紹介する、チェーン創始者・サ翁。英語圏の人でも、白髭の老人である以上、断定辞はお約束の「～じゃ」。(撮影島田)

現実には存在しないのに、いかにもそれらしく感じられる日本語、いわば話し手の人物造形に用いられる、こういった現実離れたバーチャルなことばづかいを、従来の位相論と区別し、とりたてて特に「役割語」と名付けて扱ったのは、金水(2003)である。(12)(13)はまさに役割語としての断定辞の特徴的な使い方への気付きと指摘であるが、同じ断定辞じゃによる表現でも、現実に使われる「～じゃー」「～じゃのー」と、そうではないあくまでバーチャルなことばづかいとしての「～じゃよ」とを特に明確に区別し意識している点で、指摘の鋭さに瞠目させられる。日常的に断定辞じゃを用いる西日本出身者ならではの着眼であろう。

なお、(14)に指摘される問題は、金水(2003)に言う「キャラ語尾」(p.188)の問題である。定延(近刊)によれば、「キャラ語尾」は、「コンピュータとの類似性」「キャラクタモデルの類似性」の2点から、さらに「キャラコンピュータ」と「キャラ助詞」に二分される^(註17)。(14)に示される三例の「キャラ語尾」は、定延(近刊)に言う「キャラ助詞」にあたるものであり、これらが何に由来するか、つまり鳴き声(「～ワン」「～ニャー」など)か名称(「～ゾウ」「～ワニ」など)か挙動(「～ニョロ」「～ピョン」

など) か…といった違いは、より専門的な立場からは、さほど重要ではない。

☆ 音韻史と歴史的仮名遣いに関する問題

(15)★ちょうちょを「てふてふ」と言うのに習うと、お蝶婦人は「おてふ婦人」、みやこ蝶々は「みやこてふてふ」と、ここらあたりは思いつくが、カンフーのかけ声が「アテフー！」になるとは私くらいしか思いつくまい。(大阪府 松本ペン太) 8巻 p.192 [考察の館]

(16) ●「てふ」と書いて「ちょう」と読んでいた時代、「てふ」と読ませるには何と書いていたのだろう。(私立某手前育成会/けちゃべ) 11巻 p.205 [考察の館]

先の(3)は現代仮名遣いに関する指摘であったが、(15)(16)は歴史的仮名遣いに関する問題の指摘や疑問である。高校生からの投稿作品であろう。

歴史的仮名遣いは平安時代の音韻に基づいて定められたものであり、「蝶々」を「てふてふ」と書くのは、実際にそのように発音していた時代があるからである。これが音韻変化を来して^(注18)表記との乖離を起し仮名遣いの混乱を招いたことなどを含め、仮名遣いが単に表記の分野に止まらず音韻史と表裏をなす問題であることを、大半の学生は、大学の教職科目で習うまで全く知らないままであったりする。

ともあれ、カンフーのかけ声は最初から「アチョー！」であって、これを「アテフー！」と発音した時代はなかったのであるから、「アテフー！」と書くことにはならない。と大まじめに解説するものではそもそもないのであるが、「アチョーはアテフーとはならない」というインパクトに満ちた想定外の例示と、その理由とを合わせて示すことで、仮名遣いと音韻史の関係についての基礎知識は、学生たちの印象に深く刻まれることになるらしい。

ついでながら、「てふ」を「ちょう」と読むようになったということは、現実の音声面では「てふ」に限らず、語中尾のハ行音がワ行化していた上に、母音が連続した部分も長音化していた、ということである。よって「て」の次に「ふ」が来るような音の連続を持つ語じたい消失したことになる。「てふ」と読ませる(読むと「てふ」になる)音の連続がなければ、それをどう書くかについて頭を悩ませる必要もない。もちろん、「あわてふためく」のように、たまたま「て」と「ふ」が隣接することはしばしばあり得たが、その場合は、「てふ」と書かれた文字の並びをそのまま「てふ」と読むことになるだけである。

おわりに

以上本稿では、別稿(島田(2004))に引き続き『笑いの文化人講座』の資料性に注目し、特に同書における教材としての側面を指摘して、その利用価値ならびに可能性について記述した。

本稿に示した教材としての活用例の大半は、本学に在籍したこの6年の間に、担当した授業科目に

において折々に実践を試みたものに基づく。県下の若年層なら誰もが知っている、サブカルチャーの性格を持つ、など複数の意味において、同書は極めて卑近な資料である。これを学問的な場面において取り上げ、そこに含まれた指摘や疑問をめぐって実は高度な専門性を伴う日本語学的な解説が成り立ち得ることを知ることは、学生たちにはある種の驚きであったらしい。

こういった実感を伴う問題意識の喚起によって、今まで何気なく見過ごしてきた身の周りのさまざまな言語事象が、受講前とは異なった見え方で目に（あるいは耳に）飛び込んで来るようになる。もちろん、学びの成果として、それらの言語事象に対して日本語学的な説明を行い得るだけの専門的な知識と視点とを身につけたからでもあるが、本稿の筆者が目指したのは、受講生ひとりひとりにおけるこの段階への到達であった。いかに専門的な知識を項目として詰め込んでやって、生真面目な学生たちが教えられた通りに試験の答案を書いたとしても、それは単なるエコラリアに過ぎない、現実の言語生活との関わりにおいてそれらの知識が活かされない限り、機械的で従順なオウム返しなど意味をなさない——教育実習先での授業参観を通してそう痛感したことから、より臨床的な日本語学^(註19)のありよう、つまり日常における言語事象の扱いや現場での国語教育になるべく結びつくことばの学問について意識せざるを得なかったためである。

本稿では、筆者の専門である日本語学的な観点から見て教材となり得る作品を専ら取り上げたが、この他にも、日常生活における確率統計に関わる指摘など数学的な観点から教材化が望めそうなもの、経済や行政に関わる疑問など社会科の教材になりそうなもの…といった具合に、専門家の手にかかれればいくらでも使い道のありそうな題材が、同書には相当収められているように見受けられる。内容の難易度などを調整すれば、大学における教育に限らず、高校や中学、さらには小学校での総合学習用の材料としての応用もあり得るかも知れない。

すでに述べたとおり、投稿者の大半を中高生が占めることで、同書の内容には顕著な特性が見られるが、教育現場で起こったちょっとした事件を描いたものの中には、先に示した(7)や(10)のように、現行の国語科教育の抱えるいろいろな不備を露呈したような作品も多く含まれている。教育学部において教員養成にたずさわる立場の筆者にとって、国語教師のたまごである学生たちにそういった問題について考えさせ、実感を伴っての意識付けを促すのにも、同書の作品は格好の材料でもあった。これは、たまごならずとも、現職の学校教員に対しても同様であると思われる。ともかく、同書をめぐっては、さまざまな活用の方向が考えられてよいだろう。

単行本の発刊から最終巻の刊行まで17年間の長きにわたって人気を博し、県下の若者文化に一時代を築いた『笑いの文化人講座』は、以上のような無限の可能性を秘めた貴重な郷土教材である。これを教材として捉え直す専門的な見地からの扱いが、同書の価値を最大限に引き出すのに不可欠であることは、言うまでもない。

本稿は、ひとまずその嚆矢となればとの思いから、内外のさまざまな立場の読み手を対象に想定して記述した。日本語学関係の専門家には自明の（もしくは常識にあたる）事柄をいささかくどくどしく記したのは、そういった事情による。香川を去るにあたっての置き土産としたい。

- (注1) 後に専務を経て社長となり、2002年3月に退職。翌4月に四国学院大学社会学部に着任、カルチュラルマネジメント学科で教授をつとめ現在に至る。
- (注2) 本稿の筆者も数年前、ゼミ生の女子学生から実体験として同趣の話を聞いたことがある。彼女が高校在学中、授業中の珍事を描いたある投稿作品が同誌に掲載されたが、彼女はまさにその場（その事件の起こった教室内）に居たという。そして、あれを投稿したのはクラスの誰だったのだろうかと級友の間で話題となり、大学生になった今でもまだ気になっている、との話であった。
- (注3) もてなす側が食べ終わった人に対して発するこの「よろしゅうおあがり。」は、「食べる」の尊敬語「あがる」を形容詞「よろしい」が連用修飾したもので、文字通り「召し上がり」方の「よろしい」ことを意味する。田辺聖子氏は、これを「その心は、——さしたることなき食事をご機嫌よくおあがり下され、ありがとうございます——とでもいうものであろうか、食事を供するあるじ側の心持から発した挨拶である。」と解説している（講談社現代新書『大阪弁おもしろ草子』1985.9）。すでに食べ終わった段階で用いられることから、これを「食べる」意の「あがる」ではない（「一丁あがり」の語やすごろくの「あがり」などと同じ「完成する」「終わる」を意味する動詞）とする見方もある（山口（1997）（2005））が、受け容れ難い。帰宅時の挨拶「おかえり。」や歓迎のことば「あら、いらっしゃい。」などととも捉えらるれば、食前の「遠慮しないでたくさんおあがり。」と同じく、食後の「よろしゅうおあがり。」も、「召し上がる」の意の動詞と見るのが穏当であろう。
- (注4) ヒガシとなるのは、東京の下町ことばであるとされる。真田（1983）によれば、1977年当時の調査において、東京都の北端から埼玉県南部にまで分布の広がりが見られたと言う。
- (注5) Xe（シェ）の音節はささやくやうに Se（セ）、又は ce（セ）に発音される。例へば、Xecai（^{しかい}世界）の代りに Cecai（せかい）といひ、Saxeraruru（さしゑらるる）の代りに Saseraruru（させらるる）といふ。この発音をするので、「関東」（Quantô）のものは甚だ有名である。（原文はポルトガル語、土井忠生氏の訳による）
- (注6) 関西方言における「よう～せん」については、古代語における「え～ず」と表現の組み立てが似ているが、むしろ漢文訓読における可能表現の読み下し「よく～す」との関係において捉えられるものかも知れない。
- (注7) 形容動詞を形容詞の一種と見なす立場もある。特に、日本語教育の現場などに用いられる現代語の文法では、「高い」「暑い」などいわゆる形容詞を「イ形容詞」と呼び、いわゆる形容動詞を「ナ形容詞」と呼んで、ともに形容詞の扱いがなされる。
- (注8) 松本（1993）を参照。
- (注9) 欠けていたのは説明そのものだけでなく、生徒の理解状況を把握した上でそういった説明が必要であると洞察する能力であり、あるいはそれ以前に、そのような説明を行うための基本的な文法知識や品詞論の概念などであったようにも思われる。これについては、現場教員の能力や知識の問題にのみ帰するものでもあるまい。彼ら国語科教員の養成にあたる我々教育学部スタッフの問題（意識の持ち方や授業内容など）、あるいは、学部のカリキュラムにおける根底的な問題でもあると言える（教科指導の方法論など実践的な訓練の量的充実、教科の内容に関する専門知識の習得といった質的充実とのバランスの中でこそ生きてくるものである）。
- (注10) 徳川・ネウストプニー（1999）に「Welfare-Linguistics」の概念が示されている。
- (注11) 国立国語研究所報告 30(1)～30(6)（国立国語研究所編）。
- (注12) 以下の総合的なまとめとしての記述は、真田（1979）の分析・解釈に負うところが大きい。

- (注13) この作品が後に『笑いの文化人講座 Remix① お笑い!学校の事件簿』に再録されるにあたり、コメントは「㊥ うっしゃー、1ランクアップじゃ。/㊦ あまりうれしくありませんが…。」と改められた。方言色はやや軽減されてしまったが、二語の価値的な上下に関する言及は同じである。
- (注14) 『大阪弁ちゃらんぼらん』(筑摩書房 1978.6)。
- (注15) 前出の九州出身の歌手が演じる熱血教師「金八先生」の叱責の際の口癖が、「この、バカチン!」であったことが想起される。
- (注16) 国立国語研究所による「外来語の言い換え提案」が話題になり、例えば雑誌『日本語学』(明治書院)などでも、それに関する特集が組まれるなどした(22-7「特集・いまカタカナことばを考える」[2003.7])。
- (注17) 「キャラコピュラ」と「キャラ助詞」とには、その生起環境においても異なりが観察され、「キャラ助詞」のほうは文において「文末らしい文末」に出現が限られるという。
- (注18) 「てふてふ」から「ちょうちょう」までの変化の過程は、ハ行転呼音現象による「てうてう」の語形を介し、連続した[eu]の母音が長音[yo:]となって「ちょーちょー」の語形に至る(現代仮名づかいにおける長音表記のルールで「ちょうちょう」と書くだけで、実際の発音は「ちょーちょー」)。さらに末尾の長音が短くなると「ちょうちょ」。
- (注19) 真田(2003)に言う「研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民との間に架橋する」「臨床的な知」の構築は、社会言語学に限られるものでもなく、国語史学(日本語史研究)を含めたあらゆる分野において大いに目指されてしかるべきものであろう。

【参考文献】

- 金水 敏 (2003) 『バーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店)
- 定延 利之(近刊) 「キャラ助詞の生起環境」(『KLS 26』 関西言語学会 proceedings)
- 真田 信治(1979) 「標準語の地理的背景」(徳川宗賢編『日本の方言地図』第5章 中公新書 533)
- 真田 信治(1983) 『日本語のゆれ 一地図で見る地域語の生態一』(南雲堂)
- 真田 信治(2003) 解説・「臨床ことば学」への期待(道浦俊彦『「ことばの雑学」放送局』PHP文庫)
- 柴田 武(1987) 『柴田武 日本語エッセイ1 ことばの背後』(小学館)
- 島田 泰子(2005) 地域情報誌人気コーナー『笑いの文化人講座』の単行本化とその資料価値
一地方語文献としての可能性について一(『香川大学教育学部研究報告 第1部』124)
- 田尾 和俊(2004) 『超麵通団② 団長の事件簿 「うどんの人」の巻』(西日本出版社)
- 徳川 宗賢(1979) 「文献国語史と方言」(徳川宗賢編『日本の方言地図』第4章 中公新書 533)
- 徳川 宗賢・Neustupny, J.V. (1999)
「対談 ウェルフェア・リングイスティクスの出発」(『社会言語科学』2-1)
- 松本 修(1993) 『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』(太田出版)
- 山口 仲美(1997) 『山口仲美の言葉の探検』(小学館)
- 山口 仲美(2005) 連載◆言葉と文化〈最終回〉 いとおしいのう(『星座 一歌とことば』26号)

【付記】 定延(近刊)に関しては、著者本人より許諾を得て引用した。公刊前の論文の参照について便宜をおはかりいただいたこともあわせて、お礼申し上げたい。